

論文

「三つの一神教における宗教と紛争・・・平和への道筋はあるのか」

(全 10 回)

塩尻和子 (筑波大学名誉教授)

本論文は 2022 年 11 月から 2023 年 3 月まで、NHK 文化センター埼玉スーパーアリーナ教室において計 10 回の講座 (オムニバス形式) として発表したものである。筆者は、昨年 2 月以降のロシアによるウクライナ侵攻を契機として、改めて世界の平和を考慮する際に、今日の世界で社会的にも経済的にも大きな影響力を行使する一神教、つまりユダヤ教、キリスト教、イスラームの歴史的な相互関係から今日の紛争の在り方を検討し、拙いながらも、人類の生存をかけた平和への道筋の構築を模索するものである。

読者の皆様の忌憚のないご意見をお待ちしています。

第 1 回 「三つの一神教の独自性と共通性」

1、独裁的政治への不安感

今日、世界では、先進的で民主的だと期待される国々に、相次いで自国中心主義的で独裁的な風潮が生じている。その陰では、今日の世界ではあつて欲しくないような、ある種の変化が起きようとしている。特に 2022 年 2 月からロシアがウクライナに侵攻したことによって、この変化の一端が明らかになった。その予兆は、ちょうどこの時期に世界的に蔓延した新型コロナウイルスによるパンデミックに乗じる形で、同時進行的に流布しているとみられる。残念なことに、コロナ感染への対応に汲汲とする私たちには、その変化に気づくことは難しい。

重要な点は、その変化の多くは一神教、特にキリスト教の信者が多い欧米の国々から発生していることである。そして表向きには、いくつかの深刻な国際問題の原因を宗教対立・宗派対立に置き換えて、一般大衆の意識の裏で政治的な紛争や混乱を長引かせる政策がとられるようになっている。実際に私たちの身近なところでも、少しずつ変化が起きているが、それは急激な変化ではないので、多くの方は気づかないままに日々を過ごしてしまうかもしれない。これまでも世界の歴史が動くときには、そんな些細な変化がきっかけになることが多かった。注意深く見なければ見過ごしてしまいそうになるが、識者の一部からは、すでに警告とみられる見解も発せられている。

世界の政治・経済の中心が、今日のように欧米キリスト教世界にあるのは、17 世紀中頃から始まったイギリスとフランスによる重商主義によって、植民地獲得競争が世界中に展開されるようになった時代からであり、欧米中心の世界地図はほぼ 400 年間、続いてきたと見ることができる。しかし、今日、これまでの不変不敗だとみられてきた欧米中心の世界

構造が崩れようとしている。かつては、キリスト教という一神教が欧米の世界進出の背景となっていたが、いまや数字の上でこそ、キリスト教が世界で最大の信徒数を誇るものの、その宗教的権威は弱体化している。それでも今日も、ユダヤ教・キリスト教・イスラームという一連の一神教が、世界人口の 70%以上の信徒を擁していて、その影響力は無視することができない。

一方、これらの一神教に対して、対抗的な立場から一神教を批判し自らの勢力を鼓舞しようとする多神教世界からの対抗的戦術も勢いを増してきている。このような時代背景のなかで、私たちに要求されるものは、対立を解く鍵となるものを把握することである。それは、ユダヤ教・キリスト教・イスラームという一連の一神教の中に根強く生きる相克の要因を明らかにしながら、共存の可能性を探る努力である。世界の宗教のなかで「一神教」とは何かを学び、多神教世界との対立を緩和して、共に平和的共存を考えることは、ユダヤ教・キリスト教・イスラームという世界の一神教の関係性を考察し、今日の情報化時代において、変化したつつある複雑な世界観を理解するために、非常に重要なことである。

本稿では私たちに直接間接にかかわってくる問題、つまり日本における一神教と多神教の対立を学ぶことから始めていきたい。仏教徒が多数派を占めるわが国では、近年、特に一神教に対する批判が激しくなっているからである。この国では、仏教ばかりでなく、多神教とされる神道の立場からも、一神教に対する批判が高まって来ている。特に注意をしなければならないことは、識者の間で一神教批判が激しくなることによって、その過程で多神教への評価が急激に高くなっていることである。日本のこのような現状は、ある意味では、キリスト教・ユダヤ教・イスラームという世界に展開する一神教への理解が妨げられる可能性があり、近い将来に起こりうる世界情勢の変化を見誤ることも危惧される。

2, 宗教進化論の影

19 世紀末からドイツを中心にして盛んになってきた宗教史学は、主に聖書学者を中心にして、聖書の教えを先行する世界の宗教、たとえばバビロニアやヘレニズムの多神教の宗教世界と対比して研究してきた。そこでは多神教世界は時代的にみて遅れた世界であり、時代が下るにつれて、進化した人間の間で一神教を採用するようになった。つまり一神教は宗教の発展段階では、最終段階で最善の形であるというのが西洋キリスト教世界の学者の見解である。19 世紀半ばに発表されたダーウィンの進化論に刺激を受けて進化の概念を宗教に適用し、人類発祥以降、すべての宗教は「多神教」であるが、その中から、特殊な形で「一神教」が誕生した、という宗教進化論が唱えられた。つまりアニミズム→多神教→一神教、という宗教の発展段階が描き出されたのである。それによると、近代社会になっても今なお、多神教や呪術崇拜を続けている民族は、いまだ未開状態にあるとされた。

この理論は 1930 年代まで続けられたが、社会科学における進化論の退潮に伴って、文化相対主義による激しい批判にさらされて、宗教進化論も下火になった。しかし、宗教をめぐる近代化理論の底辺では、この思想は生き続けている。つまり、キリスト教から見れば、一神教は最も進化した優れた宗教形態であるという立場は、今日までも消えていない。イスラ

ームに至っては、進化を問うまでもなく、絶対的な神の意志のもとで神が定めた最後の最高の宗教形態であるとする。

他方、西洋的な一神教的世界観と、アジア、とくに日本的な多神教的世界観とを対比して、最近、後者のほうが平和的で自然保護の観念からみても優れている、という主張が強くなってきている。しかし、世界の歴史を概観してみただけでも、一神教はつねに他者に対して排他的であり、多神教が寛容で平和的であったとは、言い切れない。この理論に従えば、日本の宗教は今日でも多神教が優位を誇っていて、一神教は多くのケースで多神教の優位性を証明するための道具として用いられることになる。その理論構造は、「一神教は厳格で好戦的であり、多神教は妥協的で寛容であり、二一世紀の世界の融和のためには、多神教こそが主導権を取るべきである」といった思想に要約される。

世界の歴史を概観しただけでも、一神教はつねに他者に対して排他的で不寛容であり、多神教が寛容で平和的であったとは、言い切れない。ローマ帝国の支配が多神教時代に寛容であり、一神教のキリスト教を国教として採用した後に、一転して厳格で不寛容となったとは言えないであろう。歴史上のどの帝国であっても、支配者は排他的で不寛容であり、反乱者に対しては極めて残酷であったことは、容易に理解できることである。

多神教的文化を築いてきた我が国でも、16世紀末から明治初期に至るまで続いた激しいキリシタン禁制や、太平洋戦争時の国家神道の政策が自国民に対しても対外政策においても、寛容で平和的であったとは決していえない。特に国家神道は神道という伝統的な多神教を国家的祭祀として国家の統制に利用したものであるが、今日でも靖国神社の問題にみられるように、信教の自由との関係として大きな政治的問題になっている。

3, 風土説の主張

日本では、多神教を一神教より優位とする宗教家や宗教学者の間で、世界の宗教を語る際に、風土の影響を取り上げる人が多い。その中には「風土」の研究で知られる和辻哲郎の学説に依拠して、たとえば、全般的に乾燥地で砂漠がひろがる地域には、峻厳で絶対的な一神教が興り、温暖で降雨の多い地域には、多神教が起りやすいと規定する。そうすると、自然環境が厳しい中東の砂漠からはユダヤ教、キリスト教、イスラームという一神教が生じたが、アジアや日本のように自然に恵まれた緑豊かな地域では、あらゆるものに神性を求めて崇拜するアニミズム的な多神教が発生したという。たとえば、神道は自然を大切にする宗教なので、エコロジーの思想が基盤となっている、とする立場は、その代表例である。

このような「風土説」は一見、まともなような感じがするが、決して正しい見解ではない。和辻哲郎は風土論を使用して宗教に触れているが、それはあくまでも人間社会の在り方に力点が置かれていて、それによって一神教・多神教という区別が起こったとはしていない。世界宗教史を概観すれば、一神教か多神教かという区別を自然環境に起因するものとするには、根拠が乏しいからである。自然環境が峻厳な地域には一神教が発生しやすい、とすれば、気候が厳しいインド亜大陸に多神崇拜のヒンドゥー教が発生したことについて明確な説明ができない。また、神を立てない宗教であるが、仏像崇拜を取り入れた仏

教も北インドで発生した。

一神教が興ったとみられている中東の砂漠地域でも、じつは多神教と偶像崇拜はユダヤ教やキリスト教、イスラームという一連の一神教が発生したのちも、強固に分布していたことは、聖書やクルアーンの記事からも読み取れるが、考古学的研究からも証明されている。初期のユダヤ教徒たちは疲弊した小さな集団でしかなく、政治的に強力で文化的にも進んでいた先住民の多神教徒に包囲されている状況にあり、偶像崇拜の誘惑に負けることが多かった。そのために古代イスラエルの預言者たちが数千年にわたって自らの民に向かって、「一神教へ戻れ」と幾度も命がけで叫び続けなければならなかったことか。ユダヤ人たちの小さな集団は「中東地域の偶像崇拜という大海に浮かぶ真実の宗教の小島であった」とも表現されている。

4、重なり合う一神教と多神教

西暦7世紀の初頭ですでにユダヤ教徒やキリスト教徒の定住地も点在しており、一神教の存在が十分に知られていたはずのアラビア半島でも、マッカ(メッカ)のカアバ神殿から多神教の偶像をすべて排除するまでに、預言者ムハンマドは20年の苦難の月日を要したのである。

預言者ムハンマドがイスラームを確立したことについて、アラビア半島の「一神教革命」であると主張する研究者もいるが、この厳格な一神教も、ムハンマドが生きているうちから多神教時代の多くの風俗習慣を取りこんで体制化されていくことになった。もちろん、イスラームの儀礼として採用された多神教の残滓は、イスラームのもとに新しい意味を与えられており、以前の多神崇拜のままのかたちで取り込まれたものではない。しかし、そこに明らかに多神崇拜の要素が残っているのは、否めない事実である。

わかりやすい例をあげれば、私たちが初めからキリスト教の祭りだと信じて疑わない世界的な行事、クリスマスやイースター、最近ではハロウィーンも含まれるかもしれないが、これらもローマ、ゲルマン、ケルトなどの異教文化がキリスト教と習合したものである。世界各地でいまなお盛んに行なわれている聖者崇敬も、一神教・多神教の区別なく存在し続けている。それぞれの宗教も、信徒数が増え時代が下がるにつれて、戒律の制定、聖典解釈、使徒信条、教義論などの神学論争が展開されるようになる。草創期には素朴な信仰であったものが、神学論争によって実に様々な付属物が追加されてくるものである。

比較宗教学の見地からこのように考えるなら、歴史の課程で付随物が多くなった今日の宗教には、一神教と多神教を明確に区別することができなくなっているのではないか。乱暴な言い方をすれば、そこでは「神」は「神々」とであると同時に、「神々」は「神」であるということができる。そうでなければ、ユダヤ教もキリスト教もイスラームも、多神教の伝統や風俗習慣を、このように安易に大量に導入することはなかったであろう。一神教と多神教を分けるものは、「神」と「神々」のどちらに力点が置かれているのかという違いだけである。

一神教はその教義や宗教儀礼において、どのようにして一神教的な性格を堅持してい

るのかを考える際には、逆に一神教が多神教の要素をどのようにして取り込むことになったかという事例を見るのが有効である。そこで、最も厳格な一神教であるイスラームの事例から考えてみよう。

カトリックや正教とは異なって、厳格な一神教を遵守するイスラームでは、崇拝対象は神のみであり、創唱者のムハンマドですえも聖性が認められていない。したがって、偶像崇拝は厳禁とされ、まして聖者を認定する組織などは存在しない。しかし、このような厳格な一神教でも人々の尊敬と信頼を集めた宗教指導者や神秘主義の導師がその死後、民衆によって、聖者と認められる。興味深いことに聖者のリストには高名な宗教指導者や勇名を馳せた将軍と並んで、誰ともわからない漂着死体などまで幅広く含まれる。聖者は特別な覚者でなくとも、その死後、墓などに超自然的な霊力の発出が認められると、現世利益を求める民衆の崇敬の的となる。近年、聖者として崇敬されることになった人の中には、1979年にイランのイスラーム革命を成功に導いた法学者アーヤトッラー・ホメイニーが含まれる。また、イスラーム教徒の中には、キリスト教の聖者だけでなく、生存する高位の聖職者をも崇敬することがある。

ユダヤ教徒の間にも、聖者を崇敬し、聖者廟を参詣する人々が少なくない。彼らはアブラハム一族の墓所であるヘブロンのマクペラの洞窟や古代のラビの墓、自分たちの父祖の墓などに詣でることが多い。また中東地域などでイスラーム教徒と共存してきたユダヤ教徒の中には、病気の平癒や家族の和解などの現世利益を求めてイスラーム神秘主義の導師の聖廟へ詣でるものもある。

しかし、キリスト教徒が、ユダヤ教やイスラームの聖者を崇敬することは、ほとんどの場合、見られない。

これらの現象を見ていくと、一神教と多神教を明確に区別することはできないのではないかとと思われる。一神教を掲げるユダヤ教もキリスト教もイスラームも、多神教の伝統や風俗習慣を公式であれ非公式であれ、このように安易に大量に日常の儀礼に導入していることを考えると、これらの三つの一神教は歴史の過程の中で唯一の創造神との契約に基づいて、「一神教」を標榜しているに過ぎないと考えることもできる。結局、日本人が神社や寺院で神々や仏に向かって祈るとき、その祈りの対象は、一神教の信徒が祈る唯一神と異なるものではなくなるのである。

一般に一神教は、正確に理解しようとするれば、日本人の宗教観からは遠い宗教だと考えられやすいが、三つの一神教思想の中には、道徳や社会的倫理の観点のように、仏教や神道に近い多くの教えや教訓が見つかる。このように考えると、多神教である日本の伝統宗教と一神教は、ともに同様の宗教的真髄を表象しており、日本の伝統宗教と、ユダヤ教、キリスト教、イスラームとの相互理解も共存も不可能ではないように思える。人間も含めた森羅万象がすべて神の被造物であると同時に、神の存在を証しするものであるという一神教の教えと、神殿を宇宙の中心と位置づけ、自然界の営みに神性を見ようとする神道の教えとは、共通点も多い。また、神を立てない宗教である仏教においても、不変で永遠の絶対的な法を崇めそれに全身で従うことは、まさに一神教の神への信仰と変わりはない。

魂の救済を求める人々にとって、「神あるいは神々あるいは仏との応答」の場が、宗教であることを考えると、三つの一神教にとっても、日本の伝統宗教の思想を互いに理解しあうことを通じて宗教の新しい地平が開けてくるように感じられるのである。

繰り返しになるが、今日の変わりつつある時代背景のなかで私たちに要求されるものは、対立を解く「鍵」となるものを把握することである。その「鍵」の一つは、ユダヤ教・キリスト教・イスラームという一連の一神教の中に根強く生きる相克の要因を明らかにしながら、共存の可能性を探る努力である。